

釣れ釣れなるままに

2006年思い出の釣行記 PART. 3

魚弓躍浪時放

鹿島釣狂

☆釣行日 平成18年6月3日(土)
☆入釣場所 雄冬湯泊岬
☆釣果 ホッケ35cm1、ハゴトコ2、カジカ1、ガヤ3
叔父 アブラコ40cm1、ハゴトコ1、ガヤ2



湯泊岬までのゴロタ場

歳には勝てず

少年の頃の私に釣りの手ほどきをしてくれた叔父と、酒を酌み交わす機会があり、久しぶりに共に釣りをしようと約束した。叔父は現在72歳になるが、若い頃は筋肉の塊のような人で、陸上、野球、バレーボールにと辺りをブイブイ言わせていたものである。現在では、安穩とした生活を送っているが、地域のキノコ会の会長を引き受けているらしい。つい先日も仲間と共に、春の山菜採りで遠別の山奥まで出かけたという。誘われれば船釣りをメインに防波堤での投げ釣りにも親しんでいるという。仕掛けについても話が及び、根掛かり防止用オモリの作り方にまで発展したのだった。

ボシャボシャと刈り込んだ胡麻塩頭に地肌が混ざるようにになったが、今でも体つきは健康そのもののように、少々、ハードな計画を練ってみた。1泊2日で増毛港のホッケのサビキ釣りに始まり、雄冬でのソイ釣り、明け方にはオロロンラインをさかのぼって遠別まで足を伸ばし、今話題のカスベやヒラメ、サクラマス釣りにも挑戦してみようと考えた。どれも2人で出来るようにと道具や仕掛け、エサもそれなりに準備した。

6月3日（土）、午前中はエサ等の準備に費やし、約束の時間に間に合うようにと滝川にある叔父宅に向けて出発した。玄関先で迎えてくれた叔母が「明日の朝、この人に用事を頼んでいたのにすっかり忘れてしまって……。二人の約束もあったようだけど、予定を狂わしてしまっておめんね」とすまなそうに言う。そこで、本日は湯泊岬のソイと戯れることとした。

北竜経由で増毛へ向かった。増毛港では投げ釣りの車が駐車していたが、ホッケのサビキ釣りをしている人は少ない。釣り人に聞いて回るが釣れていないという。陽の高い内に湯泊岬に着いた。ソイが動き回る時間帯になるまで間があるのでゆっくりと先端を目指す。

国道からの降り口に梯子があったが、風雪に曝されて朽ちかけている部分も見えるので大事を取って私が先に下りる。一番下の横木を強く踏むと案の定、その横木が崩れ落ちた。それには大きな岩を運んで足場として置いて対応する。古希を過ぎるとバランス感覚が急激に衰えるといわれるが、叔父も例外ではないらしく、梯子の一段一段を慎重に下りてきた。梯子を下りてからはゴロタ場が続き、叔父は岩から岩への一歩に躊躇し、その一歩をなかなか踏み出すことが出来ない。

先にも書いたが、運動会でどん亀のような走りしかできなかった私は、叔父が青年団の100メートルで颯爽とトップで走る姿を誇らしく思った。また、地域のお祭りで奉納野球大会があって、草野球チームのピッチャーとして、快刀乱麻よろしくバツバツと三振を取る姿に憧れを抱いたものだ。バレーの指導者としても活躍し、自分が率いるチームを全国優勝させたりもしている。その叔父が次の岩への一歩を踏み出せないでいるのだ。私は現在でも自慢できる体力は持たないが、彼を見ているとこの先、さらに不安が募ってきた。

兎にも角にも、ようやく目指す岬の先端に着いた。暗くなるまで釣れないとは分かっていたながらも早速、仕掛けについてあれこれ蘊蓄^{うんちく}を並べながら竿を振り込み終えた。もちろ

ん、叔父には今までに一番の実績があり、根掛かりも比較的少ない場所に入ってもらい、私はすぐその横にあるガラ場に並んだ。そして、薄暗くなるまでは少年の日のことなどを昔話にして話が弾んだ。

遠き日の思い出

私は、ひなびた田舎の農家の次男坊として育った。遊び場はいつも周りの森と川である。カケスを捕らえようと御用駕籠を持ち出しては親に尻っぺたを叩かれたり、林の木にからまるツタから採れる木の実を頬張り、口の中を四季折々の色に染めていたものだ。悪童仲間と川の淵に潜ってヤマメやカジカを突いたり、畑からこっそりいただいた馬鈴薯やトウモロコシを河原で焼いてはひもじさをしのいだ。時には、短く切った山葡萄のツルに火をつけて紫煙を吸い込む悪戯に興じ、大人びた仕草を得意げに誇示して見せたりもした。

中学生ともなると一人前の働き手として農作業を手伝い、ノルマとして科せられた畑の草取りを早々に済ませて、近くの川で釣り糸を垂れたものだ。ウグイが産卵期で瀬に付いている時などは、ハラを婚姻色に染めた30cm程のものを何匹も釣っては祖母が育てている鶏のエサにして喜ばれもした。釣りの手習いは、針金を曲げてその先にヤスリをかけ、ヤナギの木に結んだ木綿糸の先に付けて、ミミズやバッタをエサに各農家の庭先にある池や用水路でドジョウを釣っていた。

川らしい川に釣りに行ったのは小学校4年生の時だ。石狩川の支流になるが新十津川町と雨竜町を境にする尾白利加川である。子どもだけで行くのは危険なので禁止されていたが、今回誘った叔父から釣りに誘われたのである。嬉しくて小さな胸をわくわくさせていたが、叔父に「用事で出かけるから帰ってくるまでにミミズをとっておけよ」と言われて、馬糞などを積んだ堆肥のところで探した。いつもならニョキニョキ出てくるはずなのだがこの日はなんの加減なのか見つからない。あちこち掘り返してみたが結果は同じである。悲しくなって途方に暮れていると、叔父が用事を済ませて帰ってきた。訳を話すと、叔父は無言のまま、刈り取った草を積んだ畦道で玉蔵ミミズをごっそり捕った。叔父はやはり無言で自転車に乗ったので、「連れていってもらえないな」と覚悟しながらも後ろに続いた。しかし、どういうわけか「帰れ」とは言われなかった。

釣りをしたところは、比較的川が狭くなったところで、背後はヤナギの林である。チョコチョコとウキが沈んだところで慌てて上げると、後ろの木の枝にからまってしまう。それでも、自分で何とかその絡まりを取りながら、小さなウグイや鮒を釣った。今になって思うと叔父は私を試していたのだろう。現代の子どもたちは、何から何まで過保護に育てられているが、私たちの少年時代は、大人の姿を見ながら自分で乗り越えていくしか術がなかった。無言の内にもそれを示したかったのだろう。

いつも落ち着きが無く親を心配させていた私だが、そんなことがあってから、兄と2人だけで、尾白利加川に釣りに行くことを許されたのだった。

遠き少年の日に思いを馳せていたことに併せて夕闇が迫ってきたこともあり、^{おぼろけ}朧気に霞んで見えていた竿先がガクガクと揺れた。アタリにはほど遠い小カジカだったので海にお帰り願うが、いよいよ魚がエサをあさる時間帯だ。35cm程のホッケやガヤ、ハゴトコも釣れ出したが、叔父にはアタリが出ない。

午後8時を回ったところでようやく叔父にもアタリがあり、アブラコを上げた。40cm級のものではあったが、軟らかい竿のため、なかなか顔を見せず、叔父は久しぶりにアブラコの強い引きを堪能したようだ。私は、ソイの囷引きで攻めてみる。引いている途中、ゴツゴツとしたアタリは出るのだが、ハリ掛かりしない。エサのオオナゴのハラにソイの口の歯形が付いている。叔父も投げ釣りとは平行してウキ釣りを始めた。すると小物ながらガヤやハゴトコがウキを消し込んだ。

22時、次の日の約束もあるので、釣り場を後にした。帰りは暗くなったこともあり、叔父はさらに歩を慎重に進めた。釣果は散々だったが、叔父との語らいで、遠い昔の少年の日々を偲ぶことになった。それは、経済的には質素で苦難も多かったが、少年の日のほろ苦い思い出と共に、甘美な心の豊かさも思い起こさせてくれた。

魚引|躍浪

釣りの手ほどきを受けた叔父の連れ合いが主催している書道展の招待状が届いた。五十の手習いで始めた叔母だが、現在では道展会友や全道展会員だという。私は書道というものにはあまり縁がなく、その奥深さについては理解できない。しかし、毛筆文字が持つ絵画のような独特の雰囲気は伝わってくる。会場に入ると叔母が丁寧に案内してくれた。

叔母から「楓葉驚花秋興長松影迎風舞鶴帰」などの作品について解説を受け、私は「へえ」とか「ほう」「フンフン」と納得顔をして言葉を返してはいるが、実はちんぷんかんぷんなのである。中に、漢詩50文字での大作で、その意味を要約すると「美味しく酒を飲んで朗らかになる」というものがあつた。下戸の叔母にはふさわしくない言葉だと思いつつも話に合わせていると、その漢詩は叔父が選定したという。酒をこよなく愛してきた叔父ならではの選定で、同類である私も、その文字の一つ一つが妙に酔っぱらってはいるが全体としてはほのぼのとした温かい輝きを放っているように思われた。

そんな私だが、「引魚躍浪時放・・・」という書には興味をそそられた。「釣り糸を垂れていると大きな魚が掛かった。その強い引きを楽しんでいると、魚が踊るように跳躍した。その大魚の周りに波紋ができ、どこまでも広がって、自分の足下にまでひたひた押し寄せてくる。この優雅で至福なひとときを求めて釣りをし、そのような時にこそ自分の心が自由に解き放たれていくのを感じる。」と勝手に解釈し、悦に入っている。